生徒向け校長通信 ～ 名言にちなんだエッセイです

あうん

教師と生徒・保護者があうんの呼吸で教育ができることを願って‥‥

第 ２０ 号
令和４年１月３１日

尊大な羞恥心と臆病な自尊心

中島敦『山月記』

昭和初期に活躍したが惜しくも早世した小説家、中島敦の代表作とされる短編小説。1942（昭和17）年の「文學界」に、「文字渦」とともに「古譚」と総題して発表された。中国唐代の伝記「人虎伝」に基づき、詩に執心して、ついに虎に変身してしまった男のすさまじい宿命の姿を描いて、作者の自嘲と覚悟を語る作品。

（Amazon「本の紹介」から転載）

今年も書道部校外展に僕の書いた「虎」を展示してもらえることとなった。昨年から挑戦しているが、やはり書は難しい。自分が書きたいと思う字のイメージはある。でも書けない。お手本があっても書けない。自分のイメージした通りに身体を動かすことができる者をアスリートと呼ぶのならば、書道家はものすごいアスリートである。

先日、学校通信『きらり』欄で、書道部部長の伊原さんにインタビューした時、彼女は「臨書はそのまま書くのではなく、自分なりに解釈して書きます」と話してくれた。お手本の字の中におおらかさを感じたら、そのおおらかさを自分はどう表現するか、それをつきつめていく、そんな話だった。僕も今回、虎の力強さと奔放さを表現したいと思って書いたがどうだろうか？（左上の書が僕の作品）失敗したくないという自意識が強く出てしまい、中途半端な表現になってしまったような気がする。自意識という代物（しろもの）は、この歳になってもなかなかコントロールが利かないものだ。

自意識のない人はいない。ことに思春期の頃は自意識が過剰になりやすい。人の目が気になり、人前で失敗することを怖ろしく思ってしまう。特に進路のことを考えると、自分は何をやりたいのか、自分に何ができるのか、何が向いているのか、自分がどんどんわからなくなってしまう。そうやって悩みはするが、打開するために何かを変えようとするわけでもない。自分の未来にある無数の選択肢の中で「これだ」と一つに決める勇気もない。そんな自分がいやになってくる。実はこれ、高校入学当初の僕。だから授業で『山月記』を読んだとき、李徴は自分そのものだと思った。

李徴は自分が虎になった理由の一つとして「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」をあげ、次のように言う。

己（おれ）は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶（ふんもん）と慙恚（ざんい）とによって益々己（おのれ）の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。己（おれ）の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。

李徴の悲劇は、このように虎になった原因に行き着くことができても、自分をもうどうにもできないことだ。いっぽう僕は、高校、大学といろんな経験を経て自分とうまくつきあえるようになっていった。己のうちなる猛獣を飼い慣らすことができるようになったのかは、正直自分でもよくわからない。自分を変えることができたのかもしれないし、ただツラの皮が厚くなって人の目を気にすることがなくなってきただけなのかもしれない。けれども、色々悩んだことが無駄ではなかったのだと思う。昔の CM で「みんな悩んで大きくなった」というのがあったけれど、まさしくそれだ。今でも心の内にある猛獣がひょっこり顔を出すことがあるけれど、それもひっくるめての自分だ。

そう考えてもう一度、自分の書を見てみる。そうすると、何ともお茶目で愛おしい虎に見えてきた。